

問い続ける合理性

—ジョン・R・サール著『行為と合理性』(塩野直之訳 勁草書房 2008年)を読んで—

〈近代社会の成立〉研究プロジェクト 萩原 富夫

「近代社会の成立」研究プロジェクトは、毎月一回必ず開催されて足かけ3年、その都度取り上げ読んできた文献は30点以上にもなる。この会は、4人で構成され、開催毎に報告者の推薦する文献を読むことから、1人の勉強ではとても得難い文献と接触するだけでなく、討論に埋め込まれた合理性が生み出す飛躍(後出)の新たな気づきの機会ともなっている。上記の図書は会で取り上げ、大いに学びを触発され、報告者には貴重な一冊となった。学生諸君にも読んで頂ければと思い、理解半ばの恥も顧みず紹介させて頂いた。

本書の原典は2001年に発刊され、我々の読んだ邦訳本は2008年の出版だから新刊本の紹介とはならない。しかし、扱っている核となるテーマは、近代社会の出来事を決定的に規定してきた“合理性”という問題である。我々の日々の生活ではそれについて意識的であると否とに関わらず常に思考や行動のどこかに存在し、何らかの影響を与え、新たな問題を生み出してもいる。その生成の現実への著者の洞察が合理性の興味深い可能性を提示する。

嘗て近代の合理性は「鉄の檻」と総称され、人の行動を縛り、自由を阻害する印象を与えてきた。最近では、この合理性について「道具的理性」という名称が付けられ、その意味は古典的な内容と変わらない。「所与の目的に対するもっとも経済効率の高い手段は何か、その適用を計算するとき用いるタイプのこと」の意味であり、「合理性とはただ、目的のために手段を見出すことだというのである」。尤も、後者の道具的理性と表象している意味は、鉄の檻が持つ負の観念を引きずるのではなく、日常生活レベルに引き戻し、行動と意識

の改善の可能性、例えば“本物”に気づいて立ち戻る時の様に、考え直しの可能性が意図されている。

サルはこの合理性について次のように捉えている。古典的な解釈である、手段のみに特化し狭く静的で無機質な合理性ではなく、目的と手段の双方を行為の過程に収めて、その関係の柔軟で開かれた可能性の方向へと向かう動的な創造作用として捉えている。そもそも生きた合理性が最も動的にその働きを発揮する瞬間は行動の中においてである。すなわち、「志向性の状態」を言い、行為の、「事前意図、行為内意図、身体運動」の連続的な構造をなす、生を生きる過程が意識した対象に向かって実践状態にある姿そのものである。実践状態が自らの自由の行使であり、自発的行為の過程であるとき、そこに働く合理性がモノゴトの創造的で構成的な働きとして作用し、そこに“飛躍”という珠玉の効果さえ齎すのである。

合理性の働きは独立した能力をもつものではない。合理性は行為の構成作用の中で構造的に展開する「志向的状态」の過程に働く。志向的状态において、合理性は知覚や思考、言語行為と共に存在し、信念や欲求、希望や怖れを持つ意識の働きに制約的に組み込まれている。制約的というのは信念や欲求、希望や怖れのような志向性の構成作用の調整の仕方であり、ここに飛躍の働きが加わってくる。ある意思決定をする行為において、その事前意図から意思決定へ、そして行為内意図から身体運動へと行動の展開に際して、合理的な調整を持ってしても次への行為への移行に因果的に不十分、すなわちズレが生じているとき飛躍が働く。しかし、この合理性も飛躍も行動が予め因果的十分条件によって決定されている場合には何の躍動的な反応や作用も示されず、自由意思も働かない。従って消極的あるいは前提を置かれた従属的な行動には合理性の働く余地はなく、自由で自己決定的な意欲的な行動にのみ、合理性は創造的で構成的に伴走し、その行動に飛躍を伴い思わぬ方向性を生み出す。

サルの合理性は、自由で自己決定的な行動である意識の志向的状态の中で創造的に働き、他の要因、とりわけ知覚作用や言語行為と結びついて行動の可能性を拓いていく。サルはその志向性の細部の構成作用の事実的な動きを次のように説明している。

意識の志向性は通常われわれがモノゴトに対し、それを「意図している」状

態で、信念、怖れ、希望、欲求、意図等は全て志向的状态である。その状態は心理様態とその内容とから成っている。心理様態として意図を持つ人の行動が、働きかける世界の実在に対して、その意図の内容、例えば、こう在ってほしいということに合致するか否かがその行動への節目になる。この節目に作動する「充足条件と適合の向き」という心的システムが重要な機能的働きをする。意図する内容が世界の実在と合致していれば行動は実行へと進展し、充足条件は満たされ、合致していなければ実行されない。この時、充足条件が満たされる場合の適合の向き（責任の所在の向き）は実在が行為者の意図に沿う状態にあることをいう。更に充足条件にはその下位に志向的因果関係が組み込まれていて、知覚、言語作用に基づく自己言及が働く。心的作用として、意図の内容が実在に合致している場合、当然充足条件の適合の向きは世界から心に向かって状態にあり、同時に志向的因果として自己言及が世界に対して心に働く。以上を簡単な例で示す。私が水を飲みたい時、そこに水があるという事実の真実性が確認され、私の水を飲むという意図が進展し、私に水を飲むという身体運動を惹き起こす、という心的作用を含めた行為の構成の過程を示している。

注目すべき点は、志向性という行動のプロセスである志向的状态において、知覚と言語作用が、行為の構成の過程で充足条件と適合の向きという心的システムと共に働き、行為と思考の方向性が明示され確約されていくという事実にある。サルは言語作用には規範性が埋め込まれ、それを共有する人間相互の行動を規制すると考えている。例えば、モノゴトの現前に対して単なる視覚経験が知覚経験を惹き起こし、そこに言語作用が加わって、対象のリアルな表象、すなわち解釈をもたらす。この解釈を行うということが対象との関係に規範性を生成させるこの心的作用が自己の次に続く行動への約束や確約を生起させることになる。

志向性は個人と同様共同行為の場合にも共同志向性が起きている。共同行為で注目される事柄は制度化である。サルは共同志向性が制度的事実を創り出すことを可能にしているという。どのように創られるのか。「対象がその物理的な構造のみによっては遂行しえず、その対象がある所定の地位を持ち、その地位ゆえにある特定の機能を持つという共同の認識があって初めて遂行しうるような機能を、その対象に課することができる」という関係の構造化である。こ

ここでは共同の志向的狀態を通して、「XはCにおいてYとしてみなされる」という形式が共有される。例えば、この紙切れは、日本において、千円紙幣としてみなされる。この「として」は「という意味で」とも解され、としてと認識された対象を共同志向的狀態の決定プロセスで承認し、「地位機能」として表象させ、その共通認識の基に制度化が図られていく。

以上は本書を貫く、理論的、構成的な部分が含まれている。この部分は既に2冊の本（『志向性』、The Construction of Social Reality）で紹介されている。サールの理論は人間が自らの経験を、生き生かされ変化する不連続の連続として理解するために重要である。残りのスペースで、報告者が本書で最も魅力を感じた部分を紹介して終わりにしよう。

それは第六章である。「行為への理由で欲求に依存しないものは、いかにして創り出されるか」という合理性が持つ行為の社会的発展性の姿の洞察である。従来への理由は全て現前の欲求に依存するという解釈であった。目的は常に欲求の表象であり、その欲求を最大限にするという構図であった。従って合理性は現前の事柄にしか働かず手段に限定されてしまう。そうではなく、サールは、合理性が目的と手段の双方に関わり、むしろ、人間の思考や行動の可能性を拓く重要な要因なのだと喝破した。そして次のようにいう。「欲求に依存しない理由の創造という実践が社会の中で少しでも効力を持ちうるには、その効力は、それに関与する行為者の合理性に依拠するものでなければならない。私のかつての行動が、私の現在の行動への理由を創り出したことを私が認識しうるのは、私が合理的な行為者であるからにほかならない」と。この短い文章の中に欲求に依存しない行為の理由の所在の示唆が示されている。

欲求に依存しない理由の創造の“芽”は、既に述べた志向的狀態の中に埋め込まれていた。それは「充足条件と適合の向き」の心的システムの過程の中に存在する。ここには、言語作用が働き、それを共有する者の中で、“確約”とか“義務”とか“責任”という将来の行動を規定する要因を生み出している。充足条件と適合の向きというシステム的なプロセスには行為者の心的作用が二段階で働いていた。これをサールは充足条件に充足条件を重ねると言っている。事実の知覚作用の働きから言語行為が内包する規範的な構成作用に基づく次なる行為への具体化である。行為中に起こる言語的な自己確認から次の行為への確約、義務、

責任が生み出され、新たな規律の世界へと進展する。多くの人々個々人あるいは集団には、現前で習慣になっているその人にとって大切な行動が多々行われていて、それらは嘗て欲求に基づかない理由で構成されたものの多いことに気づかない人は多い。改めて周囲の環境をみつめていただきたい。

合理性をテーマとした社会思想が存在するのかわからない。いずれにしても、近代が個人の自己主張の時代であり、そこに合理性という心的作用が現出してきたとすれば、個人の存在表明の草分けであるルソーの自己愛的「存在論」と「自己決定的自由」の思想は共有化の拡大、厚みを増した言語行為の進化とセットにして考える必要がある。サールの合理性理解には明らかに意欲的で自立的な個人と言語行為の洞察が存在する。目先の欲得に縛られない自由で意欲的な行動が健全な合理性を促して行くのは事実のようだ。